

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第147集

# 白 岩 下 遺 跡

平成15年度 一級河川西方川住宅宅地関連公共施設等総合整備  
(統合1級) 事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第147集

# 白岩下遺跡

平成15年度 一級河川西方川住宅宅地関連公共施設等総合整備  
(統合1級) 事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 序

白岩下遺跡は静岡県西部の小笠郡菊川町に所在し、東には茶の一大生産地として名高い牧の原台地、そしてその先には遠江と駿河の境となる大井川が太平洋に注いでいる。遺跡は、一級河川の菊川が形成した沖積平野に所在し、本遺跡は菊川に合流する西方川の西岸に位置している。

今回の調査は、本研究所として去る平成9年度に現地調査を実施した「方吹遺跡」に継ぐ、二度目の菊川流域での調査となる。

この菊川流域は、弥生時代遺跡が数多く所在する地域であり、特に「白岩遺跡」は、東部では田方平野の「山木遺跡」中部では静岡市「有東遺跡」「登呂遺跡」西部では浜松市「伊場遺跡」と並ぶ著名な遺跡である。さらに、天竜川以東における東遠地域の弥生時代中期の指標となる「白岩式土器」や、後期の「菊川式土器」の中心的な分布地域を占めることも、菊川流域の重要性を表わしているといえよう。

今回は、古代末から中世の集落の一部、古墳時代の水辺の祭祀遺構と縄文時代中期の遺物包含層を調査した。このなかで、古墳時代中期の水辺における祭祀遺構は、西方川の水辺において執り行われた飲食を伴う祭祀儀礼を彷彿とさせる状況を呈し、遠江地域のなかでも不明な点が多い菊川流域の古墳時代の祭祀研究にとっても貴重な発見となった。

縄文時代以来、はるか昔から歴史文化を育んで来た菊川流域ではあるが、歴史や文化追求にとってこの地域は、他地域より調査例も少なく、かつ小規模であることから、断片的な歴史事実を地道に積み上げているのが現状である。今回の調査が、その一つのステップとなるよう、強く願うものである。

現地調査並びに整理報告事業にあたり、静岡県袋井市本事務所大東支所、地元菊川町教育委員会並びに現地調査事務所用地を提供していただいた菊川町土地区画整理組合等の関係機関、現地調査と資料整理に当られた多くの方々に感謝申し上げる。

平成16年3月25日

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

## 例　　言

1. 本書は静岡県小笠郡菊川町加茂に所在する白岩下遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地発掘調査は平成15年度一級河川西方川住宅地関連公共施設等総合整備（統合1級）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井市本事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が、平成15年11月より平成16年1月まで実施した。
3. 資料整理は平成16年1月より平成16年3月まで実施した。

4. 調査体制は以下の通りである。

平成15年度

所長 斎藤 忠　副所長 飯田英夫　常務理事 条田徳幸　調査研究部長 山本界平  
調査研究部次長 栗野克己　調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三  
秘務部次長兼秘務課長 錦出秀巳　会計係長 鈴木訓生  
調査研究員 中田 出

5. 基準点測量およびグリッド杭打設、遺構測量および空中写真撮影は、大鐘測量設計株式会社に委託した。
6. 本書の執筆は第Ⅱ章第1節、第2節を佐野五十三、第Ⅲ章第3節を鷲坂有吾、その他を中田 出が担当した。
7. 本書掲載の遺物写真は、当研究所写真室担当職員が行なった。
8. 本書の編集は、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行なった。
9. 現地調査では向坂鋼二氏に御教授いただいた。また、縄文土器について加藤賢二氏、渋谷昌彦氏に御教授いただいた。
10. 発掘調査資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

## 凡　　例

1. 現地測量では世界測地系を使用した。本書の実測図もこれに基づく。
2. 本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。  
S C 祭祀遺構　S P 小穴　S R 旧流路　S X 性格不明遺構
3. 遺物実測図、遺構図の縮尺はそれぞれの図に明記した。
4. 上層、土器の色調は、新版「標準土色帳」（農林水産技術会議事務局監修）1997年後期版を使用した。

# 目 次

序	
例 言	
目 次	
第Ⅰ章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3節 基本層序	5
第Ⅲ章 各時代の遺構と遺物	6
第1節 古代末～中世の遺構と遺物	6
第2節 弥生・古墳時代の遺構と遺物	8
第3節 繩文時代の遺物	15
第Ⅳ章 まとめ	22

## 挿 図 目 次

第1図 白岩下遺跡周辺の地質状況図（国土地理院「土地条件図」より）	2
第2図 白岩下遺跡位置図及び周辺遺跡分布図	3
第3図 調査区位置図	4
第4図 グリッド配置図及び土層柱状図	5
第5図 白岩下遺跡遺構全体図	6
第6図 古代～中世の遺物実測図	7
第7図 祭祀遺構（S C - 27）全体図	9
第8図 S C - 27北半遺物出土状況図	10
第9図 S C - 27南半遺物出土状況図	11
第10図 弥生～古墳時代の遺物実測図(1)	12
第11図 古墳時代の遺物実測図(2)	13
第12図 古墳時代の遺物実測図(3)	14
第13図 繩文時代の遺物実測図(1)	16
第14図 繩文時代の遺物実測図(2)	17
第15図 石製品実測図	21

## 挿 表 目 次

第1表 遺物観察表（須恵器・灰釉陶器・山茶碗）	7
-------------------------	---

第2表 遺物観察表（弥生土器・土師器）	18
第3表 遺物観察表（縄文土器）	20
第4表 遺物観察表（石製品）	21

## 図 版 目 次

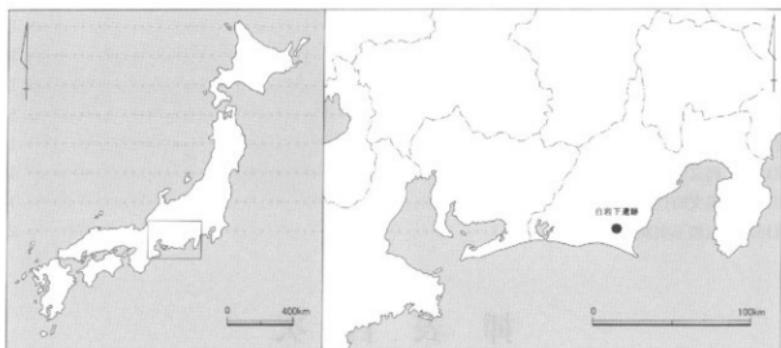
カラー図版1 白岩下遺跡遠景（南より）	国版3	古墳時代の遺物
白岩下遺跡全景（上空より）	国版4	弥生～古墳時代の遺物
図版1 中世面全景（東から）	国版5	石製品
S C - 27全景（南北から）		縄文時代の遺物
図版2 古墳～中世の遺物		



現地作業風景



整理作業風景



# 第Ⅰ章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

白岩下遺跡は静岡県榛原郡菊川町加茂に位置する。東には茶の大産地として名高い牧の原台地、そしてその先には遠江と駿河の境となる大井川が太平洋に注いでいる。町を北から南に向かって菊川が蛇行しながら流れている。西方川はこの菊川の一支流にあたり、本遺跡は合流部より約2km上流に位置する。菊川流域には数多くの遺跡が確認されているが、西方川周辺でも重要な遺跡が発見されている。特に西方川と東名高速道路の接点にある白岩遺跡では、弥生中期の標識となる「白岩式土器」が発見されている。西方川は1970年代に改修工事を行ない、その時に白岩下遺跡の存在も明らかになった。今回の調査は、平成15年度一級河川西方川住宅地閑闊公共施設等総合整備（統合1級）事業に伴い、再び河川改修を行なうため、工事に先立ち調査する必要が生じた。平成14年4月に工事の主体者である袋井上木事務所と静岡県教育委員会文化課が協議を行ない、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を行なうことが決定した。

確認調査は、平成13年度に菊川町教育委員会が行なっている。西方川右岸の堤防に、トレーナーを設定して行なってきたが、白岩下遺跡内で土器と小穴を確認したため本調査対象地となった。その確認調査のデータを踏まえ平成15年11月から平成16年1月まで現地調査を、平成16年1月から3月まで資料整理と報告書作成を埋蔵文化財島田整理事務所にて実施した。

## 第2節 調査の方法と経過

調査区は現堤防上で南北約60m東西約7mであり、非常に細長い調査区であった。表土は重機によつて取り除き、その後、人力よつて遺構と遺物の検出を行なった。廃土は一部場内に仮置きをしたが、基本的に4tダンプを用いて調査区外の土捨て場に搬出した。人力で掘削した分もベルトコンベアを使用して一箇所に集め、4tダンプにて搬出した。

調査にあたり、基準点の設置およびグリッド杭打設、空中写真撮影と空中写真測量を大鎧測量設計株式会社に委託した。遺物出土状況図は1/10、他の遺構実測図は1/20で実施し、地形測量は1/20で図化した。遺構配置図、遺物出土状況図はトータルステーションを使った。写真撮影は現地調査では6×7判（モノクロ）と6×7判（カラーリバーサル）、35mm（カラーネガ）を、空中写真撮影は6×6判（モノクロ・カラーリバーサル）を使用した。

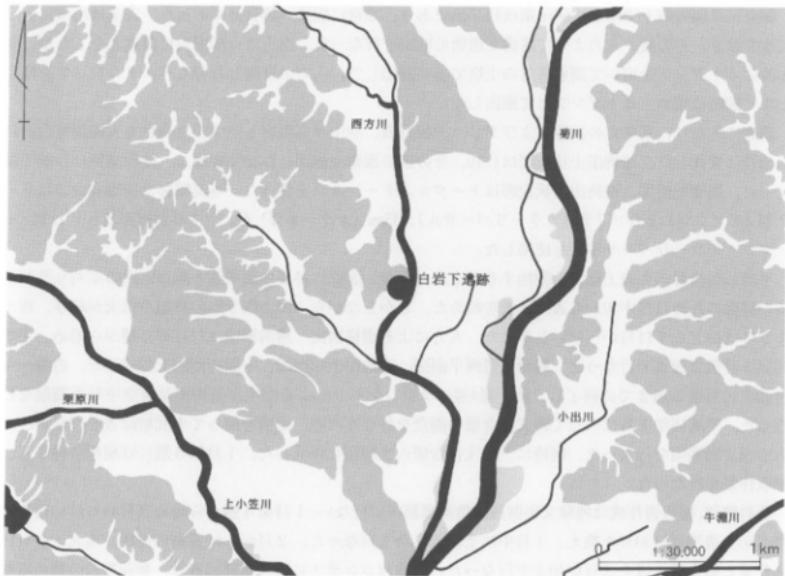
平成15年11月から表土除去を開始する予定だったが、調査に必要な諸準備と調査区内の草刈り及び立木の移動のため11月中旬から表土除去を始めた。しかしながら、廃土置き場の問題や雨天が続いた、思うようにはかどらず11月いっぱいいかなかった。人力による遺構検出・遺構掘削は11月第4週から始め、平成16年1月第2週まで行なった。同時に遺構平面図、遺物出土状況図、土層断面図を作成した。古墳～中世面を12月第3週までに終了し、続く第4週にラジコンヘリによる空中写真撮影及び空中写真測量を行なった。平成16年1月に入つて縄文包含層の調査を行なうため、重機を使って中間層除去を行ない、人力で包含層掘削を行なった。同時に、縄文包含層の土層図を作成した。1月第3週には現地を終了し、撤収作業を行なった。

資料整理、報告書作成は埋蔵文化財島田整理事務所で行ない、1月第4週から始め3月いっぱい行なつた。出土遺物は5130点を数え、1月中に土器の接合を行なった。2月からは遺物の実測、復元、トレース作業と報告書作成を3月中旬まで行なつた。遺物はコンテナに報告書挿図番号、登録番号の順に収納し、併せて取納台帳を作成した。

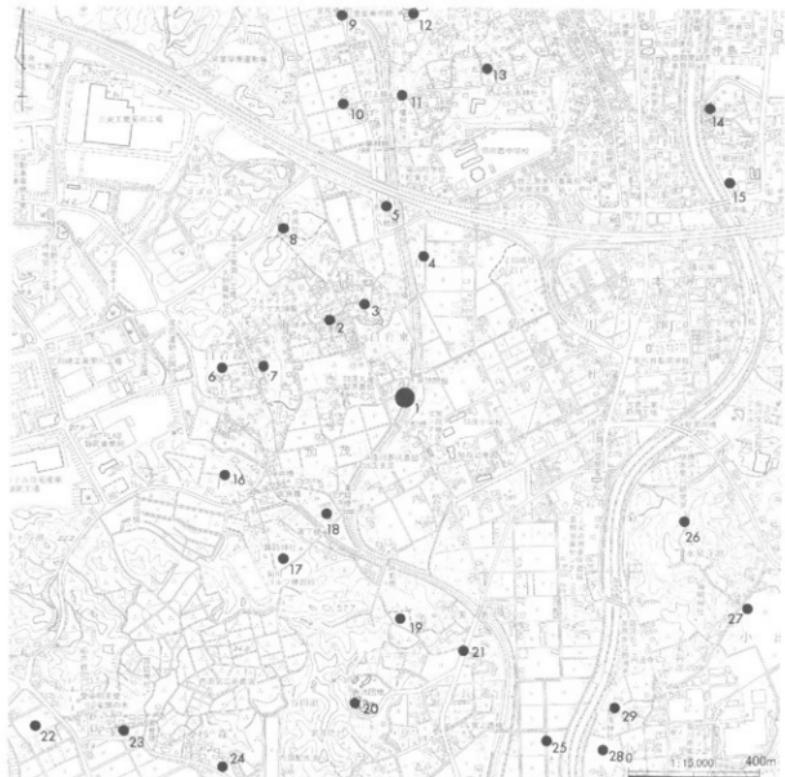
## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

白岩下遺跡は静岡県小笠郡菊川町加茂に所在し、菊川の支流である西方川の西岸に位置している。この低地一帯は菊川とその支流が形成した沖積平野である。遺跡は白岩下の集落が所在する丘陵の東端と西方川が大きく東に弧を描く沖積低地の端に位置している。この周辺は、北と西に小笠丘陵、東に牧の原台地に囲まれ、菊川を主流とする河川がそれらを削り、大小の谷が発達する。特に、菊川流域のなかで、沖積平野の最奥部まで達するのが、本遺跡や白岩遺跡が所在する平野部であり、それは菊川河口からJR菊川駅付近にまで約13kmに及ぶ。また標高は本遺跡で約16mを示し、菊川を挟んだ東西の丘陵間沖積低地の中は、2.5kmから3kmとなっている。また沖積平野を臨む丘陵には、菊川の支流が形成した小規模な河岸段丘も各所に認められる。これらの状況は第1図に示した土地条件図にも明確に表現されている。このように菊川流域の遺跡は、丘陵と沖積低地の境や河岸段丘に多く分布し、洪水や土砂崩れ等の自然災害へのリスクを負いながらも、旧石器時代から以降、連続と継続して営まれてきた。この自然条件の優位性は、温暖な気候や水に恵まれたことは当然として、平野奥部で海岸から12km、本遺跡での標高16mという緩やかな平野、そして菊川本流から数多く派生する支流に支えられている。これらの地理的条件は、水田や漁労等の生業を営む上でも多くの実りを保障し、かつ中小河川を利用した水運や交通交易の発展にも多くの寄与を果たしたと考えられる。さらに、この菊川流域は、より北側の掛川市域を含む内陸地帯をはじめとして、南の海岸一帯及び駿河湾から太平洋へというように、他地域とも結ばれており、広域的な交通交易の通地としての役割を担っていた。



第1図 白岩下遺跡周辺の地質状況図（国土地理院「土地条件図」より）



1 白岩下遺跡	7 白段II遺跡	13 打上・鹿島遺跡	19 長池北遺跡	25 宮ノ西遺跡
2 白岩下I遺跡	8 井成山遺跡	14 横左衛門遺跡	20 長池遺跡	26 小山遺跡
3 白岩下田遺跡	9 豆尻遺跡	15 島遺跡	21 長池東遺跡	27 一の坪遺跡
4 方吹遺跡	10 草林遺跡	16 広原遺跡	22 御門前遺跡	28 小川端I遺跡
5 白岩遺跡	11 八幡遺跡	17 市ヶ原遺跡	23 辻の前遺跡	29 小川端II遺跡
6 白岩段I遺跡	12 高田ヶ原遺跡	18 西袋遺跡	24 粟実遺跡	

第2図 白岩下遺跡位置図及び周辺遺跡分布図

## 第2節 歴史的環境

本遺跡の中心となる祭祀遺構の時期、古墳時代を中心として遺跡の歴史的環境の概略を記す。

静岡県内において、弥生時代から古墳時代にかけての集落は、古墳時代前期が大きな画期となる。これらの集落は、弥生時代から古墳時代前期まで継続するが、それ以降の継続性は希薄である。

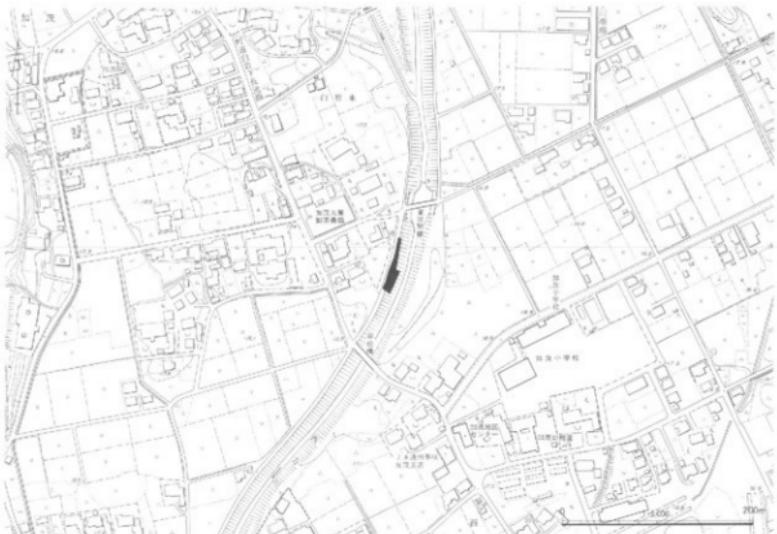
菊川流域には、東遠江地域の弥生中期の指標「白岩式土器」の白岩遺跡が西方川の自然堤防上に営まれる。この集落遺跡は、1947年の発見以来3度にわたる調査により弥生時代中期から古墳時代の遺構・

遺物が検出されているが、その大半は弥生時代に属している。また菊川流域の平野部には菊川町中内田東の坪遺跡等、多くの弥生時代の遺跡が分布している。

さらに、台地上にも当該期の遺跡が発見されている。菊川町赤谷遺跡は、牧ノ原台地の西段丘に位置し、竪穴住居跡が調査された。時期は弥生時代後期後半から古墳時代前期である。さらに同町三沢西原遺跡は繩文早中期と、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて集落が営まれる。

集落の動きに対して菊川中流域での古墳の造墓活動は、古墳時代中期以降、活発に展開される。この流域の中核をなす古墳として、三角縁神獣鏡・四獸鏡を出土し、前期後半から中期前半と言われる上平川大塚古墳（前方後円墳）がある。これは菊川流域では最も古手の古墳と考えられている。菊川中流域には後期後半の横穴式石室をもつ長池古墳群が注目されているが、横穴が圧倒的に多く約200基が分布している。右岸の上小笠川流域には、後期後半に属する山田杉森横穴群・政所横穴群・東平尾横穴群、他に稻荷部川右岸に、稻荷部横穴群佐東川左岸に岩滑ハッ谷横穴群、菊川左岸には、下本所横穴群・八幡ヶ谷横穴群が所在している。このように、古墳の造墓活動の動きから見ると、本遺跡の水辺祭祀遺構の営まれた5世紀は造墓活動の開始期と言える。

菊川中流域古墳・横穴を概観したが、その一方でこれらの古墳・横穴を営んだ造墓集団の集落や居住域の問題がある。現在までのところ、この時期の集落調査事例は東遠江地域でも数少ない。古墳時代中期に丘陵線辺の水辺が祭祀場所に選定された遺跡として、袋井市春岡遺跡がある。ここでも小型丸底壺・高杯が多く出土するが、祭祀遺物は検出されていない。また掛川市原遺跡も同様な傾向があり、集落としては、袋井市坂尻遺跡が調査されている。以上、本遺跡を取り巻く菊川中流域の弥生時代から古墳時代にかけての推移を概観した。



第3図 調査区位置図

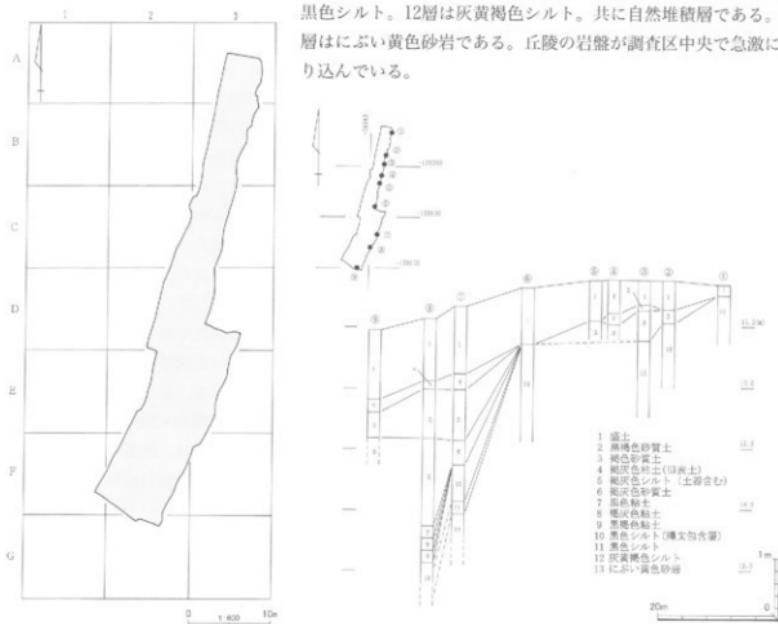
### 第3節 基本層序

遺跡周辺は西方川の沖積地と、西から伸びてくる丘陵の端部がかかる所となる。調査区北半分はこの丘陵にかかっているため、盛土直下には砂岩質の岩盤がすぐに現れてきている。しかしながら、南半分にくると西方川の沖積地が広がり、粒子の均一な土層をいくつも確認することができた。砂岩質の岩盤上には部分的に円礫を伴う褐色砂層が存在する。円礫も20cm程もある大きなもので、菊川による小規模な河岸段丘の一部と考えられる。

調査区は堤防上であり、護岸工事に伴う調査のため、必要以上に垂直に掘削することが不可能であった。そのため、堤防法面の表土をトレーナー状に重機により除去し、土層を観察することとした。トレーナーの位置は第4図の通りである。

1層は堤防盛土である。1970年代に行われた西片川改修工事の時に削られた砂岩質の岩盤も多く含まれている。2層は黒褐色砂質土である。3層は褐色砂質土である。径20cm程の円礫が混ざり、菊川の小規模な河岸段丘の一部であると考えられる。4層は褐灰色粘土である。植物遺体が多く含まれている。調査区南側は本来やや低地となっていたことがうかがえる。5層は褐灰色シルトである。土師器等を含む遺物包含層である。6層は褐灰色砂質土である。この層上面で古墳時代の流路と遺構が確認された。7層は黒色粘土である。8層は褐灰色粘土である。6～8層は西方川による自然堆積層である。9層は黒褐色粘土である。植物遺体を多く含み湿地化したことがうかがえる。10層は黒色シルトである。径5～10cmの礫を含む。南に行くに従い礫は大きくなる傾向がある。縄文時代の遺物包含層である。11層は

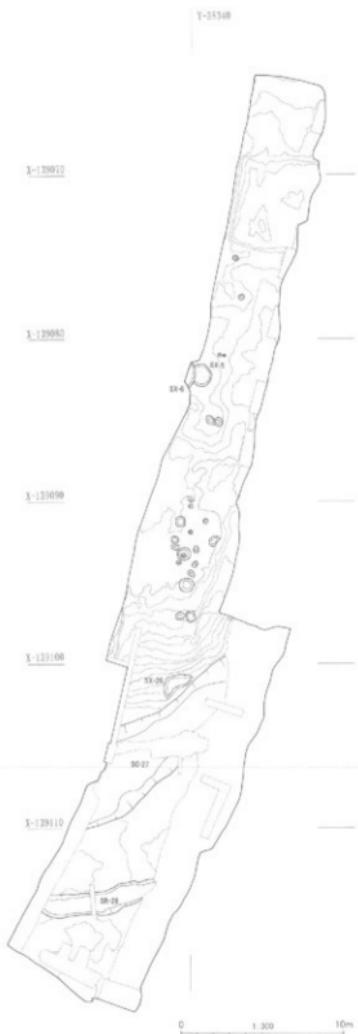
黒色シルト。12層は灰黄褐色シルト。共に自然堆積層である。13層はにぶい黄色砂岩である。丘陵の岩盤が調査区中央で急激に潜り込んでいる。



第4図 グリッド配置図及び土層柱状図

## 第III章 各時代の遺構と遺物

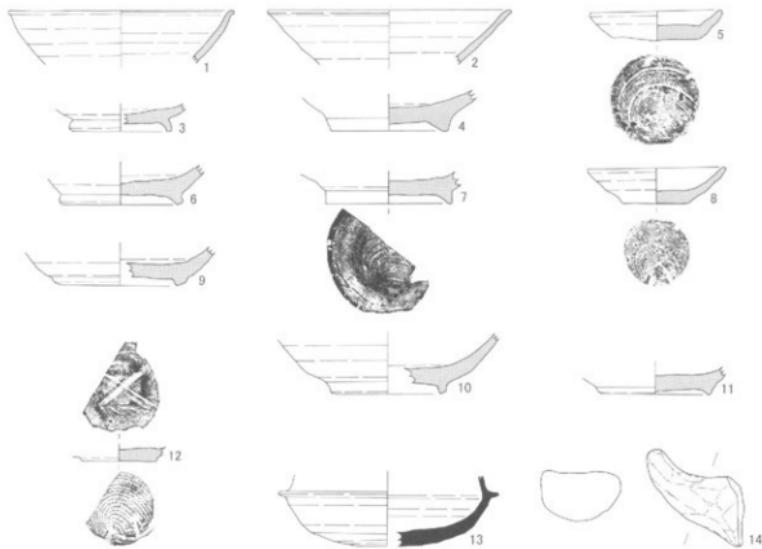
### 第1節 古代末～中世の遺構と遺物



第5図 白岩下遺跡遺構全体図

古代～中世の遺構は、E-2, E-3グリッドより北側で検出した。小穴が22基、不明遺構3基検出した。小穴の覆土はいずれも黒褐色でしまりがあり、炭化物とにぶい黄色の礫が少量混ざっていた。にぶい黄色の礫は、地山に相当する岩盤を削ったため混ざりこんだものである。検出面直上で灰釉陶器片・山茶碗片・山皿が出土していることにより古代～中世にかけての遺構と考えられる。一部、縄文土器などが上面で出土しているが、1975年の西方川改修工事に伴って川底から移動してきたものと判断した。小穴はほとんどのものが単層であり、土師器片や山茶碗片が覆土に入ることもあった。しかし、土師器についてはかなり小さな破片であるため、時代を特定することは困難であった。

1は須恵器である。器体表面には火襷模様が黒く残っている。この須恵器は包含層の中でも上層で出土していることから、移動しているものと考えられる。2, 3は灰釉陶器であり、10世紀後半のものと考えられる。口縁部の引出しあは弱く口縁は体部から直行している。釉の付着が見られるが、非常に薄く発色も悪い。高台は高く外側に張り出す。4は山茶碗で、12世紀後葉のものである。5～8は13世紀前葉のもので、5, 6は湖西・渥美製品のものと思われる。胎土は灰白色で、良く焼きしまっている。5には糸切り痕が見られる。7, 8は東遠江製品のものと思われる。胎土は灰色である。7には糸切り痕の他に成形乾燥時につけた粉殻痕が見られる。また、8にも糸切り痕が見られる。9, 10, 11は13世紀後葉のものであるが、9は湖西・渥美製品であり10, 11は東遠江製品である。12は、底部のみの残存のため、正確な形は不明である。高台は無く、回転糸切り痕がある。内面にはヘラによりバツ印が刻まれている。この他、14の瓶がS X-5の覆土から出土している瓶の取手部分である。



第6図 古代～中世の遺物実測図

第1表 遺物観察表（須恵器・灰釉陶器・山茶碗）

遺物 No.	種別 No.	國版 No.	種別	器種	度量	遺構	残存率	施成	色調	調査等の特徴	備考
1	6		須恵器	碗	不明	擴孔	10%	良	N 5/ 灰白色 口縁部のみN 5/ 灰色	圓瓶口コナデ	口径(11.6cm) 器高3.3cm 火たき痕
2	6		灰釉陶器	碗	不明	中笠包含層	10%	良	10YR7/1 灰白色	ココナデ	口径(14.6cm) 自然積付着
3	6		灰釉陶器	碗	不明	中世面	底部30%	良	25Y6/2 灰黄色	底部：圓瓶口切り痕 内・外：沿輪ナメ	直径(5.5cm) 器高1.7cm 高台後付け
4	6		山茶碗	碗	不明	表反	45%	良	5Y5/1 灰色	底部：圓瓶口切り痕 外：施釉痕	直径(4cm) 器高2.6cm 高台後付け
5	6	2	山茶	皿	東西・澤東	中笠面	100%	良	5Y5/1 灰色	底部：圓瓶口切り痕 内：施釉ナメ	口径6cm 器高5.4cm 器高1.8cm
6	6		山茶碗	碗	河西・澤東	中笠包含層	底部95%	良	7.5Y8/1 灰白色	内：施ナメ	底径7cm 器高2.4cm 高台後付け
7	6	2	山茶碗	碗	東造江	中世面	選削50%	良	N 5/ 灰色	底部：圓瓶口切り痕 内・外：施ナメ・圓瓶ナメ	直径(7.8cm) 器高2cm 高台後付け
8	6	2	山茶	皿	東造江	中世包含層	85%	良	N 6/ 灰色	底部：圓瓶口切り痕 内・外：施ナメ	口径5.5cm 底径4.1cm 器高2.2cm
9	6		山茶碗	碗	河西・澤東	中笠包含層	底部95%	良	25Y7/1 灰白色	内：ヘラケズリの施痕ナメ 外：圓瓶ナメ	底径(6.5cm) 器高2.4cm 高台後付け
10	6	2	山茶碗	碗	東造江	中世面	底部90%	良	5Y6/1 灰色	底部：圓瓶口切り痕 内・外：施ナメ	底径6.6cm 器高1.7cm 高台後付け
11	6		山茶碗	碗	東造江	擴孔	選削65%	良	内：N 6/ 灰色 外：7.5Y6/1 灰色	底部：圓瓶口切り痕 内：施ナメ	底径4.6cm 器高0.9cm
12	5		山茶碗	碗	不明	包含層	底部20%	良	5Y6/1 灰白色	内：圓瓶口ナメ 外：施便開型接ナメ	底径(5.2cm) 器高3.7cm 高台後付け
13	6	2	灰釉陶	环身	不明	SC-27上層	35%	良	内：N 6/ 灰色 外：10YR7/1 灰白色	内：施ナメ 外：施ナメ 底部：ヘラケズリ	残存高43cm
14	6		土師器	瓶		SK-5 瓢土	把手100%	良	7.5Y8/6 淡黃褐色		残存高8.2cm

## 第2節 古墳時代の遺構と遺物

D-2, 3グリッドとE-2, 3グリットを境にして、岩盤が南東方向へ急激に滑り込んでいる。南側には、先に述べたように、砂質土と粘土が互層になり河川による堆積層を作り出している。この様子から、北西から伸びた丘陵と南西に広がる低地の様子がうかがえる。低地には川が流れ徐々に埋没していったであろう。第6層（第4図参照）上面で古墳時代に流れていた旧流路を2本検出した。南側の流路（S R-28）では遺物は無く、炭化物の混ざった砂の層が堆積していた。しかし、南側の流路（S C-27）では、径約20cmの円礫が数多く出土した。また、その礫の中から多くの土師器が出土している。このS C-27は、調査区を北東から南西に横切っている。表土との高低差は約2mあるが、近世、建物の基礎となる大きなコンクリート塊の入った攪乱が存在した。そのため、検出面上付近まで攪乱されていた。中央部は東西に攪乱がはいつている。

S C-27の検出面から底面まで約40cmと浅く、緩やかな捕鉢状になっている。底面は北東から南西に向かって緩やかに傾斜している。覆土はシルトと粘土が互層になり、水の流れによる堆積であることを物語っている。北岸は丘陵の高まりにあたり、その水際では地山の土と砂が互層になっている。幅は3.5mほどである。

この流路から、弥生後期から古墳中期までの土器が多く出土している。土器は南西側に多く、残りも良かった。また、北側の岸に近づくに従い20cmほどの円礫を多く検出している。調査区北側には一部このような礫の入った層があるが、この流路周辺には無く流れ込んだとは考えられない。土器もこの円礫の上だけでなく、下から折り重なるように出土している。また、このような円礫の中に石皿や礎石、打製石斧も混ざっていた。これらの土器や円礫は人為的に投げ込まれたものと考えられる。土器は弥生後期の壺が1点出土しているが、この1点以外は土師器である。

### （弥生土器）

15の弥生土器は菊川式土器の壺である。頸部のみ残存している。口縁は欠落していて不明だが丸みを持った頸部の屈曲から口縁が立ち上がる。頸部には、擬似網文がみられるが、摩滅が激しい。弥生後期後半の土器である。

### （土師器）

#### 高坏（16～37）

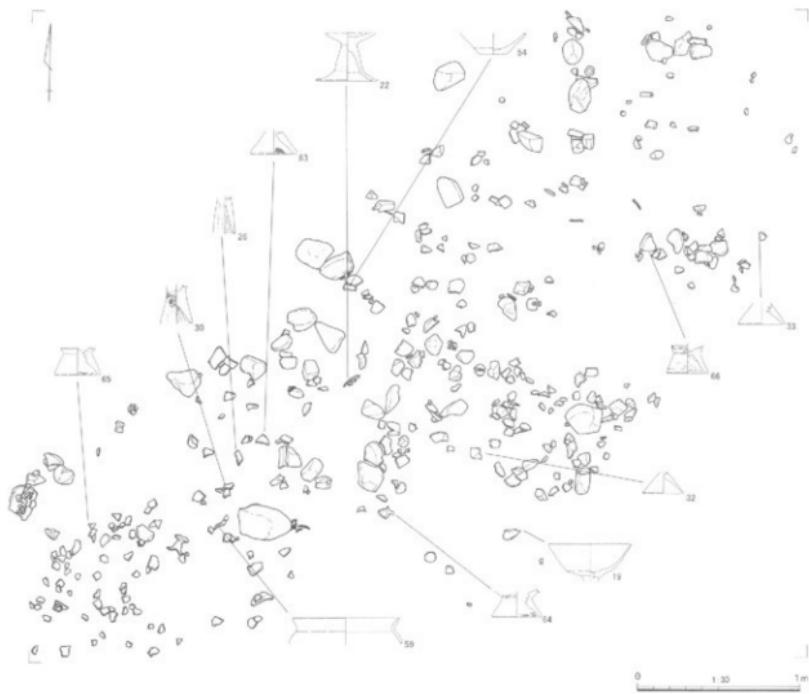
11縁部から脚部まで完全に復元可能な資料は少ない。全体を通して古墳時代中期のものが多いが、一部前期のものも含まれてくる。

19・20の坏部は底部からやや内反しながら立ち上がる。表面は摩滅してほとんど調整痕は見られなかつたが、20の外部にハケ目や内部に指頭痕がみられる。17・18・32・33は高坏の脚部である。「ハ」の字形に直線的に開き、17・18には透かし孔が3箇所開けられているものである。古墳時代前期のものと考えられる。16は坏部が底部からやや外反しながら開き、内面にミガキが見られる。脚部は直線的に開き透かし孔が3箇所開けられている。この高坏は全体縱方向のミガキがみられるものである。21～31・34～37は、脚部中央がエンタシス状に膨らみ、その下端から裙部に向かい強く屈折する状態のものである。脚内面には、しづぼり痕が見られる。また、これらは、古墳中期のものと考えられる。27には縱方向にミガキが入っている。38は台付鉢である。台付鉢と同じような作りをしているが、用途としては高坏と同じように使われていたと考えられる。



1. 黒色シルト（水井・汎化物・土器・瓦）  
 2. 埋立地盤の土（水井・汎化物・土器・瓦）  
 3. チリープ黒色シルト（水井・汎化物・土器・瓦）  
 4. 黒灰色砂質土  
 5. 黑灰色砂質土と黑色シルトの互層

第7図 祭祀遺構 (SC-27) 全体図



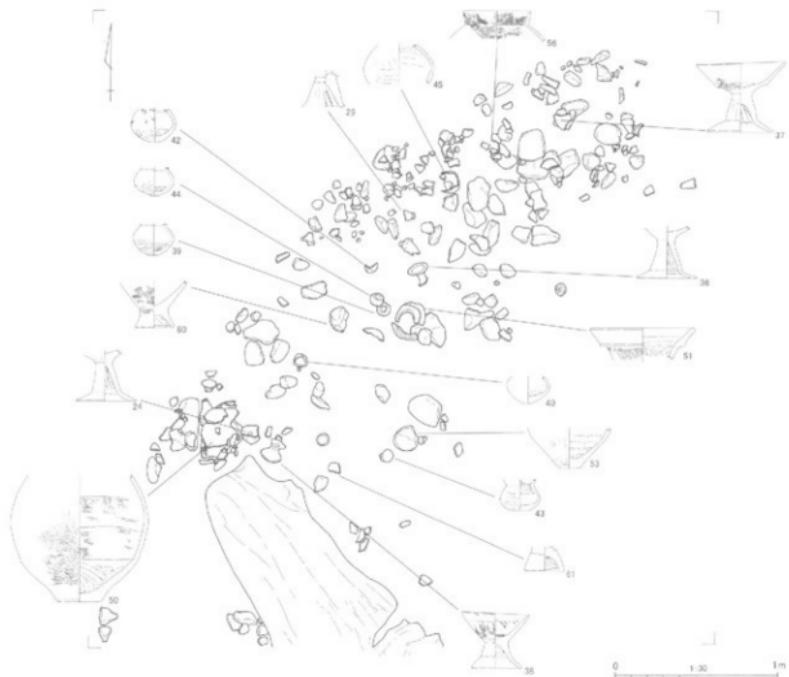
第8図 SC-27北半遺物出土状況図

#### 丸底壺（39～46）

小型の丸底壺が6点と中型の丸底壺2点が出土している。このうち、41のみ平底ではあるが用途としては丸底壺とはほぼ同じではないかと考え、ここに記すこととした。口縁部はほとんど無いが、体部から屈曲して外側へ開くものと考えられる。44・45は、外面中央部から底部に掛けて煤が付着している。また、39の内面に煤が付着しているが、用途は不明である。

#### 壺（47～54）

47～49・51・52は二重口縁壺である。表面はかなり摩滅されており、調整の痕跡の不明なところが多い。47～49は古墳前期の壺で、49のみ胎土に雲母が入り西からの搬入品と考えられる。51は頸部から緩やかに外反しながら立ち上がり、ハケによる調整の後ミガキをかけている。内面にもミガキが縦方向にかかっている。52は短い円筒形の頸部から一度外反した後、円筒形に口縁を作り出している。内面外面共にハケによる調整がなされている。51・52は古墳時代中期でも古い段階の壺である。50・53・54は壺の胸部から底部である。50は残存高が20.7cmと本遺跡では残りの良い壺となった。内面は、ハケや板ナデによる調整がされている。特に底部にかけて板ナデが目立っているが、非常に荒い調整である。外面は全体にミガキがかかっており、胸部中央まで煤が付着している。



第9図 SC-27南半遺物出土状況図

#### 壺 (55~66)

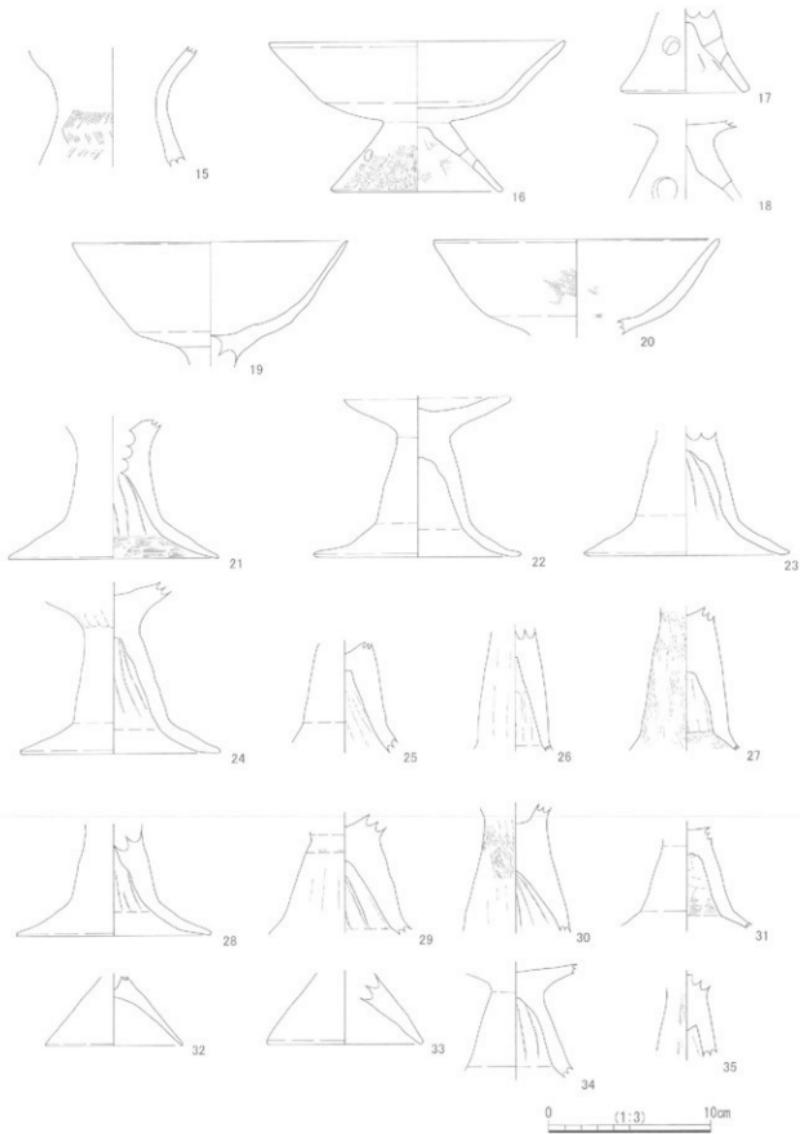
口縁部数片と脚台部数点出土しているが、胴部はほとんど無く復元可能な資料は無い。小片ではあるが、S字状口縁台付甕も確認している。口縁部の資料のみでは、形態のバリエーションについては不明であるが、長胴壺や球形壺のものが全く見られないので、おそらく台付甕と思われる。脚台部は数点出土しているが、いずれも小型で古墳時代中期のものと考えられる。

55~59までは口縁部である。55・59は摩滅がひどく調整を確認することは難しい状態であった。また、胎土が荒くかなり礫が混ざっている。56~58は、いずれもハケによる調整痕が確認でき、煤の付着も見られる。57については口縁部に指頭痕が、58には輪積み痕が確認できる。

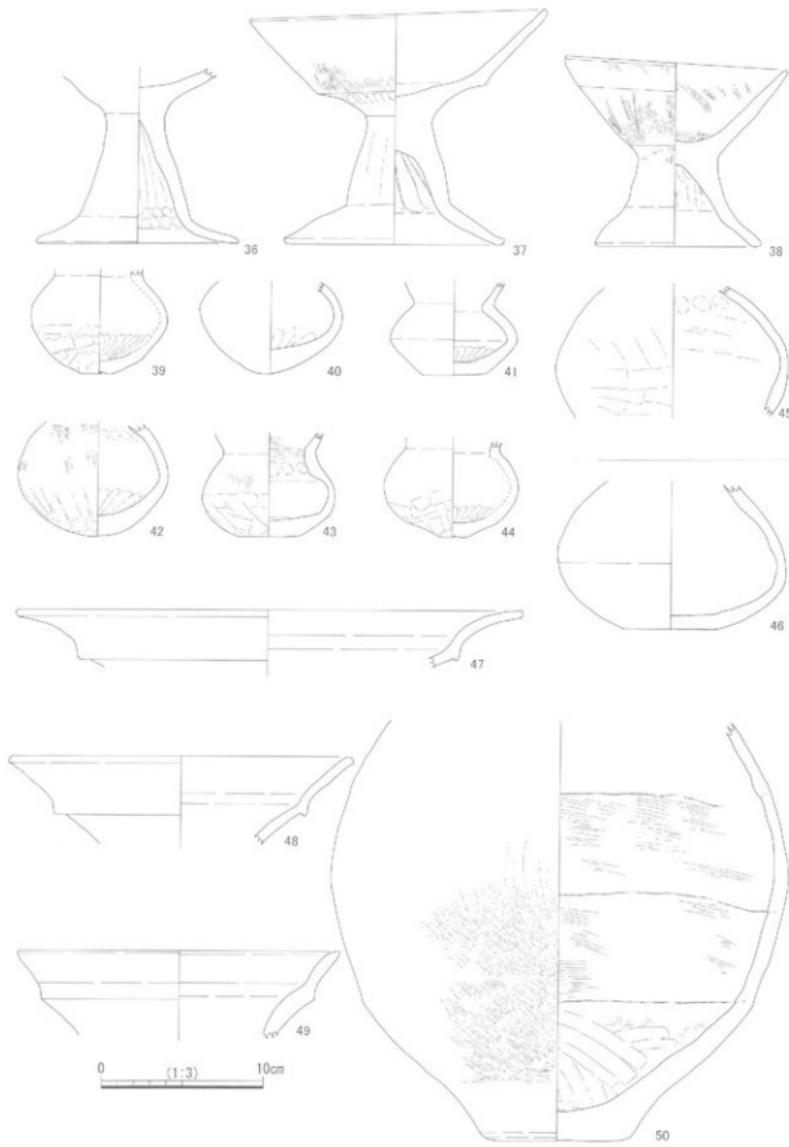
60~66までは脚台部である。60の脚台部内面は放射状に指ナデがされ、器内面には炭化物が付着している。61・66の内面は放射状に指ナデがされている。62・63・65はハケによる調整がされ、64はハケの後にヘラナデがされている。

#### (須恵器)

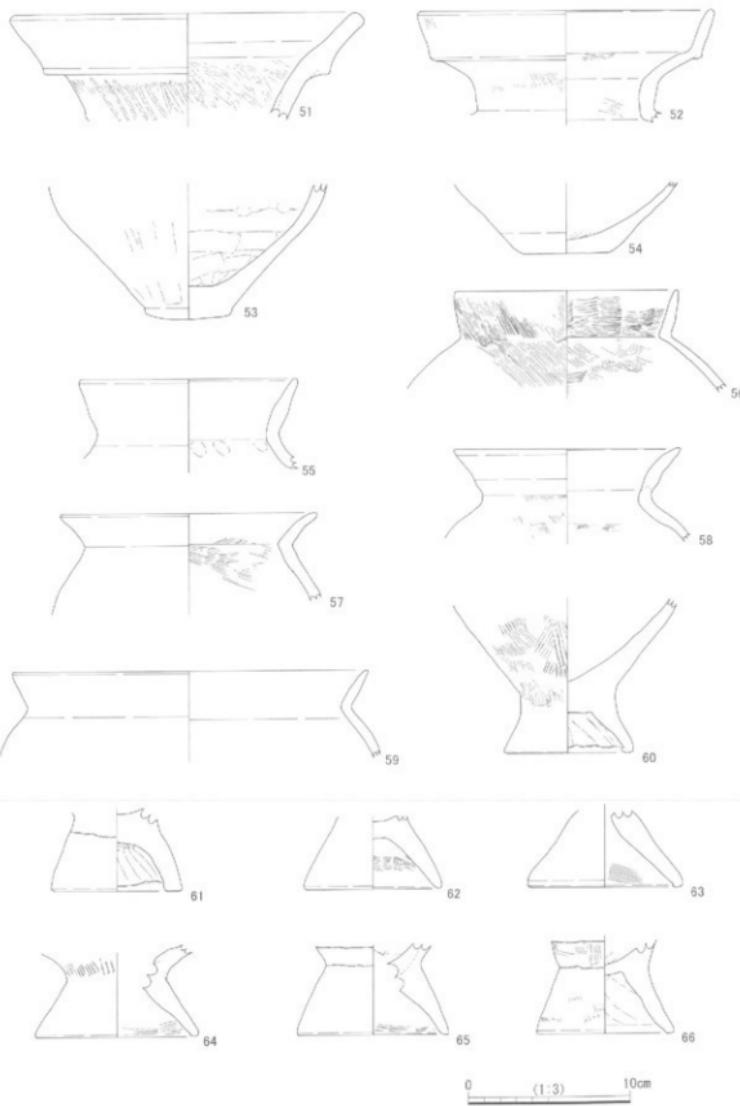
13の環身が、SC-27とSX-26付近で出土している。この環身は6世紀後半のものと考えられる。SC-27の時代からはやや下り、上部からの流れ込みと判断した。



第10図 弥生～古墳時代の遺物実測図(1)



第11図 古墳時代の遺物実測図(2)



第12図 古墳時代の遺物実測図(3)

### 第3節 縄文時代の遺物

調査区南東の低地部では縄文時代の遺物包含層が確認され、土器が少量ではあるが出土している。コンテナ1箱にも満たない量であり、時期としては概ね中期中葉～後葉に比定される。すべて破片である。ここでは出土した土器の概要を述べる。

出土した土器は、型式もしくはそれに併行するという形で大きく4群、及びその他（第5群）に分けられる。

#### 第1群：北屋敷式系土器（第13図68～80）

褐灰色で溝手便質、口縁部を肥厚させて主に爪形の連続刺突文を施す東海系の土器である。今回、少なくとも6個体分の破片が出土しているが、完全な器形が分かるものはない。文様から北屋敷式の中でも古い要素（73、74、78、79）と新しい要素（69、75）が見受けられる。近年、資料の増加に伴い本型式の細分が進められているが、いまだ不明瞭な点が多いと思われるため、ここではあえて細分はしない。また、胴部破片で条痕をもつものがあるが、口縁部破片との胎土、色調及び器厚の比較から本型式系と判断した（70～72、76、77）。

なお、1点のみ北屋敷式よりも遅く、北裏C式～山田平式かと考えられる上器片が用いている（67）。中期前葉に属する。

#### 第2群：咲畠式系土器（第13図81～87）

東海西部を中心に分布する、キャリバー形口縁部をもつ深鉢が主な組成で、曾利式や加曾利式の影響下に成立したとされる渦巻文系の土器である。今回出土した中には明確な渦巻文は見られないが、半截竹管状工具による梢円形区画文や弧状文、及び磨消纏文は咲畠式のそれと考えられる。また、すべてキャリバー形の深鉢と思われる。

#### 第3群：船元・里木式系土器（第14図88～92）

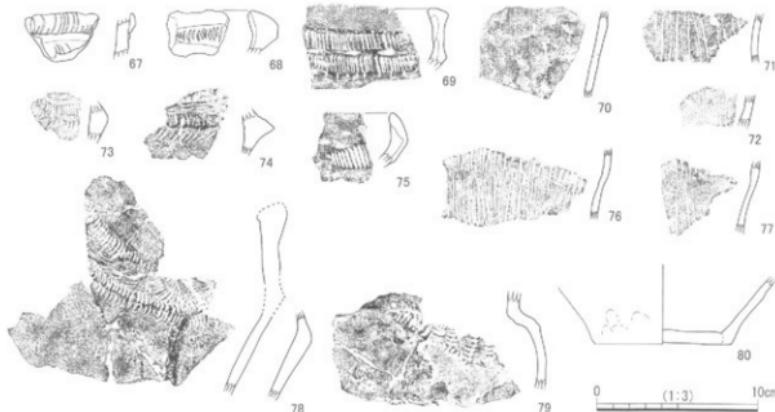
瀬戸内を中心には近畿、東海、西は九州と広範囲に及ぶ中期の土器であるが、当遺跡では中期中～後葉の船元III式から里木II式に比定されるものが用いている。地文に縄文を施すものと、撫糸文を施すものとある。89は里木II式の搬入品と考えられる。91、92は内面に縄文帯をもつ、口縁部の破片である。

#### 第4群：曾利式系土器（第14図93～115）

中部高地における中期後葉に属する土器であるが、93～111を曾利I～2式及びそれに併行、112～115を曾利3式併行と判断した。しかし、93は深鉢とすれば伊那谷から東海方面にかけて存在する、押し引き沈線のある曾利1式併行に比定されるか、浅鉢である場合、藤内1式あるいは猪沢式まで遡る可能性がある。96は井戸丸3式まで遡る可能性が強い。100～102は、曾利1式の条線が凹線及び隆帯に置換した在地のものと思われる。全体的に、曾利式と言っても搬入品の類ではなく、在地の模造品で垂流とでも言うべき様相が強く見られる。しかしながら、曾利系統の土器の占める量は今回の出土土器の中では最も多く、当遺跡におけるその位置付けは高いものと思われる。

#### 第5群：不明な土器（第14図116、117）

図示できたものの他にもほんのわずかではあるが、型式不明な土器が数点ある。



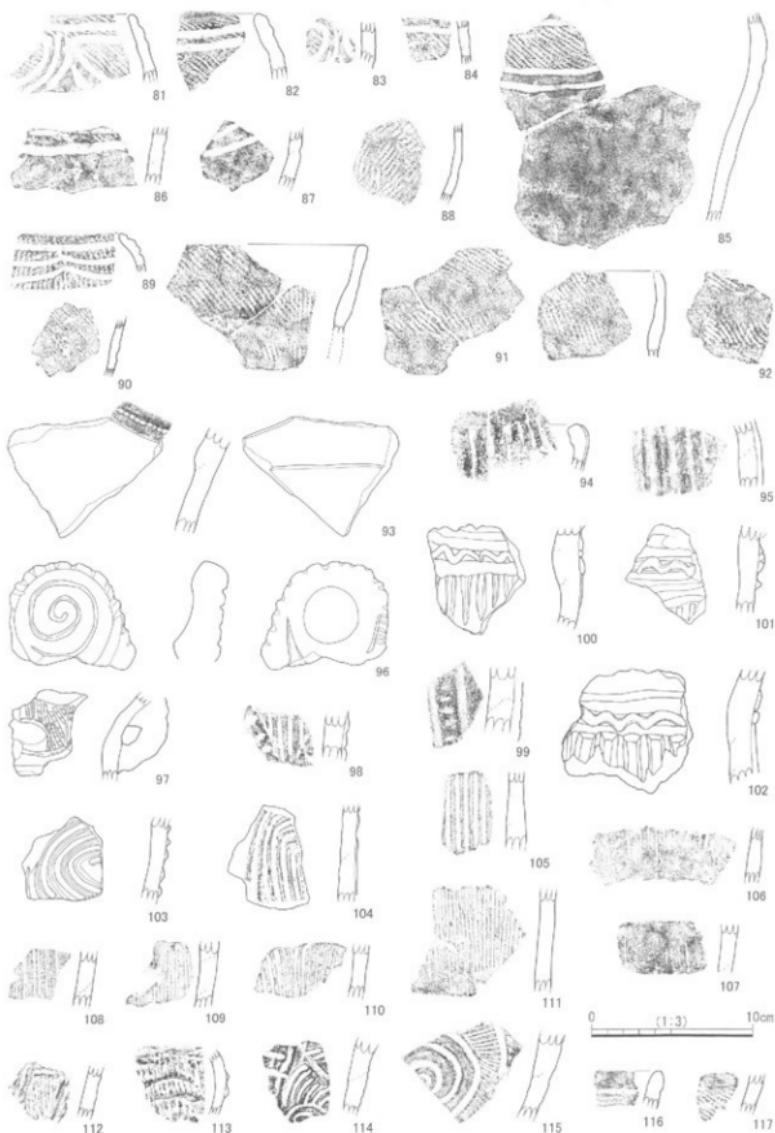
第13図 繩文時代の遺物実測図(1)

以上、出土土器の概要を述べたが、少量ながらも繩文中期中～後葉の当該地域と概ね同様の様相を示していると言えそうである。絶対的に資料数の乏しい菊川町周辺ならびに静岡県内における当該期の貴重な資料の提供となるだろう。

なお、今回の調査で確認された遺物包含層は、自然堆積によって形成されたものと思われる。また上器片を見る限り、全体的に摩滅が少なく、西方川上流からの流れ込みではなく付近からの流れ込みと考えられる。そこで周辺の地形を見てみると、本調査区はちょうど北西側からの低丘陵の山裾端部に位置しており、その端部斜面に沿って形成されたのが、今回確認された包含層と考えられる。ここ菊川町では、河岸段丘ならびに低丘陵の先端部と、比較的低地部から繩文（特に中期）の遺跡が多く発見されている。このことから、本調査区隣接地域（北西側）において、今回確認された遺物包含層の延長、あるいは繩文時代中期中～後葉における遺構、更には集落域の存在の可能性がうかがえる。

#### 第4節 参考文献

- 泉拓良 1988 「吹笛・瀬戸式土器様式」『繩文土器大観3 中期II』 小学館  
 泉拓良 1988 「船形・里木式土器様式」『繩文土器大観3 中期II』 小学館  
 大川清ほか 1996 『日本土器辞典』 雄山閣出版  
 大塚初重・戸塚充則 1996 『最新日本考古学用語辞典』 柏書房  
 加藤賢二 1979 「白岩下遺跡－西方川河川改修工事における採集遺物－」『森町考古14』  
 静岡県 1995 『静岡県史 資料編3 考古三』  
 静岡県考古学会 1998 『第5回東海考古学フォーラム 繩文時代中期前半の東海系土器群－北屋敷式土器の成立と展開』  
 齐原修二 1995 『牛岡遺跡II』 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
 渋谷昌彦ほか 1989 「東鎌塚原遺跡 発掘調査報告」 岐阜市教育委員会  
 塚本和弘ほか 1994 『善福寺遺跡発掘調査報告書』 静岡県菊川町教育委員会



第14図 繩文時代の遺物実測図(2)

第2表 遺物観察表（弥生土器・土師器）

件番 No.	機関 No.	種類 Nin	種別 品目	出模 出模	着地 着地	保存状 態	測定 測定	色調 色調	形状等の特徴 形状等の特徴	備考 備考
15	10	6	弥生土器	壺	陶土	口部100mm 底径30mm	良 良 3cm以下小壺△	10YR8/2 淡黄色	割れ裂状況	口徑10.0cm 底徑3.0cm
16	10	3	土師器	高杯	SC-27上層	50%	良 良 2cm以下小壺△ 壺身△	内：25Y3/1 黒褐色 外：10YR8/2 黑灰色	内：ハケ・アザ 外：ミガキ 三方立円形の透かし彫 縦貫槽	縦貫大溝10.0cm 底小径4.0cm 縦貫槽1.0cm 底盤透かし彫 縦貫槽1.0cm
17	10		土器類	高杯	SC-27上層	脚部25%	良 良 3cm以下小壺△ 壺身△	25Y7/2 黑褐色	内：ヘアニア・しづくのシワ 外：底盤の凹溝無不規則 三方立円形の透かし彫	口徑7.0cm 底盤高1.0cm
18	10		土器類	高杯	底灰層	脚部50%	良 良 3cm以下小壺△ 2cm以下底石・壺身△	75Y9/4 にい桂色	孔あり(透穴) 孔あり(透穴)	底盤高5.0cm 表面深さ
19	10	1.5ml	高杯	SC-27上層	脚部25%	良 良 2cm以下小壺△	内：10YR8/2 黑褐色 外：10YR8/4 淡黃褐色 部分的に75Y9/4 淡黃褐色	底盤の凹溝無不規則	口徑16.0cm 底盤高7.0cm	
20	10		土器類	高杯	底灰層	脚部45%	良 良 4cm以下小壺△	5YR7/6 黑色	内：底盤・ハケ 外：ハケ	口徑17.0cm 底盤高5.0cm
21	10		土器類	高杯	SC-27上層	脚部40%	良 良 2cm以下小壺△ 壺身△	10YR8/2 黑褐色 部分的に75Y9/4 淡黃褐色	内：ハケ・しづくのシワ 外：底盤の凸溝無不規則	底盤高5.0cm
22	10	2	土師器	高杯	SC-27上層	脚部50%	良 良 2cm以下八腹△ 底盤50%	10YR8/2 黑褐色	底盤の凹溝無不規則	底盤高2.0cm 底盤小径3.0cm 圓錐體最大径 11.0cm 底盤高5.0cm
23	10	7	土師器	高杯	SC-27上層	脚部75%	良 良 3cm以下小壺△	25Y9/2 桂色	内：二段のナフネ状方向・ヨ コナデ 外：ココナデ	底盤高7.0cm
24	10	2	土師器	高杯	SC-27上層	脚部90%	良 良 径5.0cm以下小壺△	10YR8/4 淡黃褐色 部分的に5YR7/6 桂色	内：しづくのシワ 外：底盤無	底盤高2.7cm 縦貫屢大 径1.5cm 縦貫屢小径3.4 cm 底盤高10.0cm
25	10		土器類	高杯	SC-27上層	脚部25%	良 良 底盤△	10YR8/3 淡黃褐色	内：しづくのシワ 外：底盤の凹溝無不規則	底盤高6.7cm
26	10		土師器	高杯	SC-27上層	脚部75%	良 良 指紋子△	75YR8/4 淡黃褐色	底盤の凸溝無不規則	底盤高7.0cm
27	10		土師器	高杯	SC-27上層	脚部75%	良 良 6cm以上立縫△ 壺身△	10YR7/3 にい桂色	内：底盤にハケ・ハケ 外：ハニカミガキ△	底盤高8.0cm
28	10		土師器	高杯	SC-27上層	脚部35%	良 良 4cm以下小壺△	8YR7/4 にい桂色	内：しづくのシワ 外：底盤の凹溝無不規則	底盤高6.0cm
29	10		土師器	高杯	SC-27上層	脚部45%	良 良 壺身△	25Y7/7 淡黃色	内：しづくのシワ・藍ナデ 外：指ナナ・ハケ	底盤高7.0cm
30	10		土器類	高杯	SC-27上層	脚部25%	良 良 径1.0cm以下小壺△	10YR8/3 淡黃褐色 10YR7/2 にい桂色	内：しづくのシワ 外：ハナ・ナナ	底盤高7.0cm
31	10		土器類	高杯	SC-27下層	脚部35%	良 良 1.5cm以下赤粒子△ 壺身△	10YR7/3 背褐色	内：底盤の凹溝無不規則	底盤高5.0cm
32	10		土器類	高杯	SC-27上層	脚部45%	良 良 2cm以下の背色 壺身△	75YR8/6 淡黃褐色	底盤の凹溝無不規則	底盤高4.0cm
33	10		土器類	高杯	SC-27上層	脚部50%	良 良 4cm以下小壺△	10YR7/3 にい桂色	底盤の凹溝無不規則	底盤高4.0cm
34	10	1.5ml	高杯	底盤上 高白土	都部40%	良 良 低凹粒子△ 壺身△ 2cm以下小壺△	10YR8/4 淡黃褐色	内：指ナナ	底盤高6.0cm	
35	10		土器類	高杯	SC-27上層	脚部20%	良 良 粗粒粒子・低凹粒子△	25Y7/2 淡黃色	外：ミガキ	底盤高5.0cm
36	11		土師器	高杯	SC-27上層	脚部10%	良 良 3cm以下石縫△	10YR8/3 淡黃褐色	内：しづくのシワ	底盤高10.0cm
37	11	3	土師器	高杯	SC-27上層	50%	良 良 2cm以下的小壺△	内：75YR8/4 淡黃褐色 部縫：10YR7/2 にい桂 色	内：ナデ 外：ハク・指縫 ナナ	口徑18.0cm 底盤高14.0cm
38	11	2	土器類	合付鉢	SC-27上層	90%	良 良 4cm以下小壺△	内：10YR6/3 にい桂色 外：75YR8/4 淡黃褐色 部縫：10YR7/2 白色	内：ハケ・ナデ 外：ハケ・ ナナ・ヨコナデ	口徑13.7cm 底盤高11.0cm
39	11	3	土器類	丸底盆	SC-27上層	85%	良 良 2cm以下小壺△	内：5YR1/1 紫色 外：10YR8/3 淡黃褐色 部縫：10YR7/2 白色	内：ココナデ・塗ナナ・指縫 ナナ 外：ココナナ・ハラケズ リ	底盤高1.0cm 底盤高6.0cm 内：底盤吸水
40	11		土器類	丸底盆	SC-27上層	60%	良 良 2cm以下小壺△	75YR8/4 淡黃褐色 10YR8/2 白色	内：指縫ナナ	底盤高5.0cm 内：指縫

番号 No.	地図 No.	区段 No.	種別	沿岸	港湾	植生率	構成	跡土	色調	試験時の状況	備考
41	11	2	土砂堆	丸尾瀬	勿合瀬	85%	良	砂粒△ 径1mm以下小砂△	10YR6/2 灰白色	内：赤鐵によるヨコナデ・オグサ 外：堆積の色調無不明瞭	底高3.6m 底高5.1m 外：一色なく変色
42	11	3	土砂堆	丸尾瀬	SC-27上層	80%	良	素 径3mm以下小砂△	25YR1/1 灰白色	内：白ナナ 外：橙ナダ・ハケ・ケズリ	残存高2.1m
43	11	2	土砂堆	丸尾瀬	SC-27上層	85%	良	素 径2mm以下砂粒△ 径1mm以下赤色粒子△	10YR8/3 波浪堆積色	内：ハケ・角ビ・面△ 外：ハク・ナナ・ケズリ	底存高6.3m
44	11		土砂堆	丸尾瀬	SC-27上層	85%	良	砂粒△ 赤色有△	10YR8/3 波浪堆積色 25YR1/1 灰黄色 10YR4/1 灰色	内：赤鐵ナダ・波ロツリ 外：ヘラケズリ 黒斑块 底存高1.5m 底存高5.9m	
45	11	3	土砂堆	丸尾瀬	SC-27上層	45%	良	素 径3mm以下小砂△	10YR7/1 に赤い灰白色 10YR8/2 灰白色 部分的に75YR3/4 波浪堆積色	内：白ナナ 外：波ナナ・白ナナ	残存高8m
46	11		土砂堆	丸尾瀬	泥土	75%	良	素 径3mm以下小砂△	内：SYYR7/1 灰白色 外：SYYR7/6 に赤い色 一部に10YR7/3 に赤い色	内・外：厚派の赤鐵無不明 底存高5.75m 底存高9m	
47	11		土砂堆	素	SC-27下層	口標部5%	良	素 径4mm以下小砂△	25YR7/6 棕色 部分的にSYYR7/6 緑色	外：薄緑の色調無不明瞭	残存高2.5m
48	11		土砂堆	素	SC-27下層	口標部20%	良	素 径3mm以下小砂△ 赤色有△	10YR7/6 棕色 10YR8/4 波浪堆積色	厚派の色調無不明瞭	口壁2.4m 底存高5.4m
49	11		土砂堆	素	SC-27下層	口標部20%	良	素 径3mm以下小砂△ 赤色有△	5YR7/6 紅色	厚派の色調無不明瞭	底存高6.3m
50	11	3	土砂堆	素	SC-27上層	35%	良	素 径6mm以下砂粒△	内：10YR8/2 灰白色 外：10YR8/2 灰白色 部分的にSYR7/6 棕色	内・ハク・板ナナ・波ロツリによ るナナ 外：ヘラミガキ	底存高2.2m 底存高20.7m 外側面部に堆積層
51	12	4	土砂堆	素	SC-27上層	口標部35%	良	素 径3mm以下小砂△ 赤色有△	10YR8/4 波浪堆積色	内：ココナラ・ミヅナラ ヘラミガキ 外：クリハ カ・ココナラ・ヘラミガキ	上段2.7m 底存高6.6m
52	12	4	土砂堆	素	SC-27上層	口標部25%	良	素 径3mm以下小砂△	10YR8/2 灰白色	内：ナナ・ハケ 外：ハク・ナナ	底存高6.85m
53	12		土砂堆	素	SC-27上層	口標部10% 底存50%	良	素 径6mm以下砂粒△	内：10YR8/2 波浪堆積色 外：10YR8/3 波浪堆積色 部分的に10YR8/6 波浪堆積色	内：岩礁帶・海綿質・ナ ダ・板ナナ 外：板ナナ	底存高5.1m 底存高15cm
54	12		土砂堆	素	SC-27上層	口標部10% 底存50%	良	素 径1mm以下赤色粒子△	10YR8/4 波浪堆積色	内：ハケ 外：赤鐵質？	底存高2.2m 底存高4.3m
55	12		土砂堆	素	SC-27上層	口標部20%	良	素 径4mm以下小砂△	内：10YR8/2 波浪堆積色 外：10YR8/3 波浪堆積色 部分的に10YR8/6 波浪堆積色	内：海面廻 外：波	底存高5.6m
56	12	4	土砂堆	素	SC-27上層	口標部20%	良	素 径1mm以下細△	10YR8/3 波浪堆積色 N15/3色	内：ハケ・薄緑色 外：波	口標部に底付苔
57	12		土砂堆	素	SC-27下層	口標部20%	良	素母・白色粒子・径3mm以 下小砂△	75YR7/2 に赤い灰白色	内：ココナラ・ハク 外：ヨコナラ	底存高5.9m
58	12	4	土砂堆	素	谷舟瀬	口標部20%	良	素 径3mm以下小砂△	10YR8/3 波浪堆積色	内：ハクナナ 外：ココナラ・タチハケ	底存高5.7m
59	12		土砂堆	素	SC-27上層	口標部5%	良	素 径4mm以下小砂△	内：10YR7/1 灰白色 部分的に75YR6/4 波浪 堆積色 外：75YR7/6 紅色	厚派の色調無不明瞭	底存高6.3m
60	12	4	土砂堆	台付瀬	SC-27上層	台部100% 体部50%	良	素 貝殻△ 径1mm以下赤 色粒子△ 径2mm以下白 色粒子△ 径5mm以下小砂△	10YR7/3 に赤い黄堆積色	外：ハケ・粘土等 内・部・しづく質	底存高8.4cm
61	12		土砂堆	台付瀬	SC-27上層	台部50%	良	素 径3mm以下小砂△	10YR7/2 に赤い黄堆積色	内：二段のナナ・折り返し 外：粘土等・剥離質	底存高5cm 底存高45cm 一括付質
62	12		土砂堆	台付瀬	SC-27上層	台部100%	良	素 径5mm以下小砂△	75YR8/3 波浪堆積色	内：ハケ	残存高4.3m
63	12		土砂堆	台付瀬	SC-27上層	台部55%	良	素 径3mm以下小砂△	10YR8/2 灰白色	内：ハケ 外：厚派の色調無不明瞭	底存高4.7m
64	12		土砂堆	台付瀬	SC-27上層	台部55%	良	素 径2mm以下小砂△	10YR8/2 灰白色	内：ハケ 外：取り付けた 軸立のかたまり・ハク 内・部・接合部	底存高5.5m
65	12		土砂堆	台付瀬	SC-28上層	台部35%	良	素 8mm以下・2mm以 下の赤色粒子 8mm以下 の白色粒子	SYR7/4 に赤い褐色	内：ハケ 外：厚派の色調無不明瞭	底存高5.6m
66	12	4	土砂堆	台付瀬	SC-27上層	台部50%	良	素 径3mm以下小砂△	10YR8/3 波浪堆積色	内：レギリのち接ナア 外：ハケ	底存高7.65m 底存高5.7m

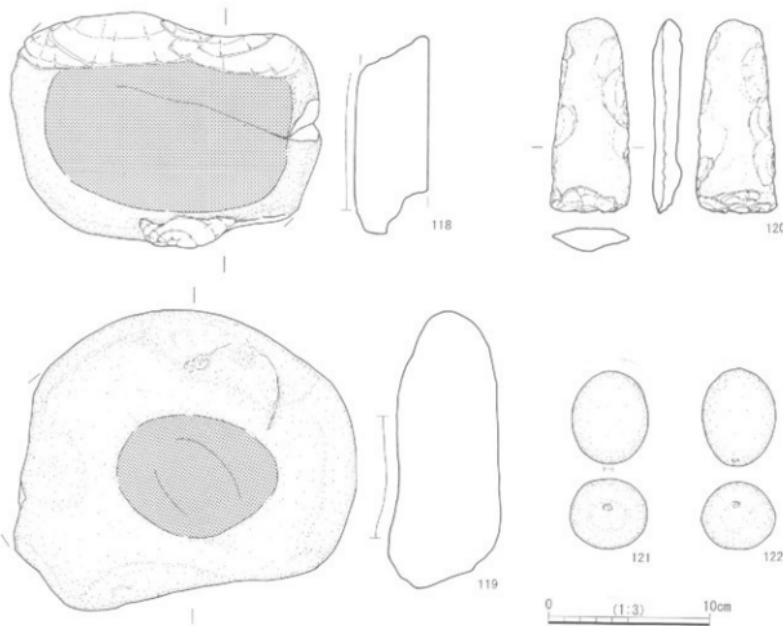
第3表 遺物観察表（縄文土器）

遺物 No.	押印 No.	団S. No.	種類	構成	無土	有土	時間	備考
67	13	5	深鉢	良	白色子・雲母	75YR6/4 に低い壺台	壺台の壠巻に円形の遺物軌跡。	
68	12	5	深鉢	良	白色子～へき 雲母	10YR7/4 に低い壺台	壺台を形成する凹面内、1条の壠城状 沈みを抱す。	
69	13	5	深鉢	良	雲母	10YR7/2 灰褐色	壺台を形成する凹面内、多く押し引く形で2角の壠城状突起。 中央に位置の壠城状突起が最も高く、又壺台上面に凹みを有す。	
70	13	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 10YR7/2 に低い壺台	やや外傾する壺台。壺台の工具による深い凹窓が認められる。	
71	13	5	深鉢	良	白色子子・雲母	10YR7/3 に低い壺台	外傾する壺台。壺台状工具による壺台の沈み。	
72	13	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 10YR5/2 灰褐色	壺台、やや内反する壺台。壺台状工具による壺台の沈み。	
73	13	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 10YR7/3 に低い壺台 外 10YR5/2 灰褐色	壺台の辺縁部灰文の後、部位の壠城軌跡を認す。	7aと同一側。
74	13	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 10YR7/2 灰褐色	波打凸縁が、記述した壺台部に壺台の斜傾斜軌跡と壺台の壠城軌 跡を認す。	7bと同じ形状。
75	13	5	深鉢	良	白色子子～へき 雲母	10YR7/4 に低い壺台	壺台口縁が、凹面を形成する凹面月形の凹面内に、下条の壠城軌 跡を認す。	
76	13	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 10YR7/4 に低い壺台 外 10YR5/2 灰褐色	キャラバーポジを認する深傾斜部、便面状工具で壺台に壠城軌 跡を認す。	
77	13	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 10YR7/4 に低い壺台 外 10YR7/3 に低い壺台	キャラバーポジを認する深傾斜部、便面状工具で壺台に壠城軌 跡を認す。	7dと同一側。
78	13	5	深鉢	良	白色子子～へき 雲母	内 10YR7/2 に低い壺台 外 10YR5/2 灰褐色	壺台の辺縁部灰文の後、多くの壺台に凹窓が認められ、多く壺台の底面に壺台状 工具による壺台の沈み。	
79	13	5	良	白色子子・雲母	75YR5/2 灰褐色	残る部分に、壺台と壺台の串刺軌跡が認められ。		
80	13	5	深鉢	良	白色子子・雲母・ 白色子子・雲母	10YR6/4 に低い壺台 75YR5/1 黒褐色(部分)	本部、指掘痕を認める。	
81	14	5	深鉢	良	白色子子	10YR7/2 に低い壺台	内側をもとに壺台、壺台状工具による沈みを認し、部分的に壺台をめぐらす。	
82	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 10YR7/2 に低い壺台 外 10YR5/2 に低い壺台	内側をもとに壺台、壺台状工具による沈み。	
83	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	10YR7/2 灰褐色	壺台状工具による沈み。	
84	14	5	深鉢	良	雲母	内 10YR7/3 に低い壺台 外 10YR7/4 に低い壺台	壺台状工具による沈み、部分的に壺台をめぐらす。	
85	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 10YR7/3 に低い壺台 外 10YR7/4 に低い壺台	キャラバーポジを認する深傾斜部、壺台状工具、半壺台状工具 を認する深窓区の後、壺台部をめぐらす。	
86	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	10YR7/2 に低い壺台	半壺台状工具による2条の沈み。	
87	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 75YR5/2 に低い壺台 外 10YR4/2 黑褐色	半壺台状工具による2条の沈み。	
88	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 75YR5/2 に低い壺台 外 10YR4/2 に低い壺台	壺台も断続的、既成孔。	
89	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	75YR5/2 黑褐色	門縫部の内側をキャラバーポジの溝跡、外側に既成孔、半壺台状 工具による沈み。	
90	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 10YR7/4 に低い壺台 外 10YR7/4 に低い壺台	外側を認める部、既成孔。	
91	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 75YR5/2 黑褐色 外 75YR5/2 に低い壺台	キャラバーポジを認する深傾斜部、内外面に崩文を認す。	
92	14	5	深鉢	良	雲母	内 10YR7/3 黑褐色 外 10YR5/2 泥質黒褐色	キャラバーポジを認する深傾斜部、内外面に崩文を認す。	
93	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	75YR5/3 に低い壺台	口縁部内側に及ぶし、口部に押し引きの沈みを認す。その構造は 既成孔。	既成孔の可動性あり。
94	14	5	深鉢	良	雲母	10YR7/1 黑褐色	やや内折する口部に、搏縫を認す。	
95	14	5	深鉢	良	雲母	10YR5/1 黑褐色	既成孔を認し、半壺台状工具による崩文を認す。一帯、 局部に側面に粘土被り付けている。	
96	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	75YR5/4 に低い壺台	刃手部、半壺台状工具による崩文。土壠部に剥離を認す。	
97	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 75YR5/4 黑褐色 外 75YR5/4 泥質黒褐色	X字形切手。押し引きの沈みを認す。	
98	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	5YR5/4 泥質黒褐色	ほぼ直立する壺台。壺台を地文に、直立状に粘土被り付けて みを認す。	
99	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 10YR5/4 に低い壺台 外 75YR5/4 に低い壺台	ほぼ直立する壺台。既位に多く落葉を貼り付け、その上に列突を 認す。	
100	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	75YR6/4 に低い壺台	ゆるやかに突出する壺台。傳形、便面状の凹面傾斜軌跡、半壺台 状工具上の被り付ける。	
101	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	75YR6/4 に低い壺台	やや外反する壺台。壺台の内側を最も貼り付け後、周辺に泥状に 粘土被り付ける。下部では既位の凹面傾斜。	
102	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	75YR7/4 に低い壺台	やや外反する壺台。中央部の壺台を最も貼り付ける。その崩間に直 狀に既成孔を認む。下部は既位から上方への移行の階層を有す。	
103	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	75YR6/4 に低い壺台	ほぼ直立する壺台。薄着底に粘土被り付ける。	
104	14	5	深鉢	良	雲母	10YR7/1 黑褐色	直立。やや外折する部品。直立状に、多く崩文を認すことによつ て剥離を削除的にさせている。	
105	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 75YR5/2 に低い壺台 外 10YR5/2 泥質黒褐色	半壺台状工具による崩文。	
106	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	75YR6/4 に低い壺台	やや外傾する壺台。便面状工具による崩文を認す。	
107	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	75YR6/4 に低い壺台	直立。やや外折する部品。半壺台状工具による崩文。	
108	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 75YR5/2 黑褐色 外 75YR5/2 に低い壺台	直立。やや外折する部品。直立状。	内直立。灰化物付材。
109	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 75YR5/2 黑褐色 外 75YR5/2 に低い壺台	直立。やや外折する部品。直立状。	内直立。灰化物付材。
110	14	5	深鉢	良	白色子子・雲母	内 75YR6/3 に低い壺台	直立。やや外折する部品。直立状。	

遺物 No.	埋蔵 No.	深度 No.	器種	施成	胎土	色調	特徴	備考
111	14	5	深鉢	質	白色粒子・雲母	7SYR6/4に赤い褐色	やや外縁する斜～深部、擦痕状工具による削文。	
112	14	5	深鉢	質	白色粒子・雲母	内：7SYR4/1褐灰色 外：7SYR6/3に赤い褐色	やや外縁する斜部。複数による凹面内に、半乾竹管状工具にて浅削文を施す。	
113	14	5	深鉢	質	白色粒子・雲母	7SYR5/3に赤い褐色	内裏する斜部。横位に粘土紐を3条貼り付けた後、その間に延縫削文で充填する。	
114	14	5	深鉢	質	白色小礫・雲母	内：7SYR4/3褐色 外：7SYR3/3褐褐色	ほぼ裏立する斜部。全体に半乾竹管状工具による浅削文、左側部、齊打する。	
115	14	5	深鉢	質	白色粒子・雲母	SYR5/3に赤い褐色	やや外縁する斜部。削文による渦巻き文と形状次線の組み合いで、右側部、浅削する。	
116	14	5	質	白色粒子・雲母	7SYR7/4に赤い褐色	横位の沈痕を施す。		
117	14	5	質	雲母	7SYR6/4に赤い褐色	縞文地文、上部は刷り消している。		

第4表 遺物観察表（石製品）

遺物 No.	埋蔵 No.	深度 No.	種類	材質	通角	法量(m)			重量(g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
118	15	4	石皿	粗粒砂岩	SC-27	19.2	14.3	4.6	16.0	
119	15	4	石皿	粗粒砂岩	SC-27	21	13.5	7	37.0	
120	15	4	石岸	黄砂岩	SC-27	11.9	4.7	1.7	12.0	刃部附近に研磨痕
121	15	4	敲石	粗粒砂岩	SC-27	5.8	4.2	4.3	15.0	
122	15	4	敲石	粗粒砂岩	SC-27	6.05	4.6	4.1	15.0	



第15図 石製品実測図

## 第IV章　まとめ

今回の白岩下遺跡の調査は、東西約7m南北約60mという細長い調査区であった。しかし、縄文時代から中世に至るまでの遺跡がまとった形で発見されている。遺構は小穴が22基、不明遺構が3基、流路が2本（その内1本が祭祀遺構）検出された。北西から舌状に伸びてくる低丘陵にかかる調査区北側では、中世の遺構遺物が発見された。この丘陵部から南の埋没谷へと下がってくると、古墳時代の流路が2本検出され、その内1本には人為的に径20cmほどの疊と一緒に土器を投棄している様子が伺えた。また、同じ埋没谷の低い所では、縄文の包含層が確認された。1970年代に行われた西方川改修工事の最、発見された土層にあたる。（加藤賢二1979）

今回の調査では、古墳時代の流路からたくさんの土師器が出土し注目された。遺物は古墳時代中期を中心にしてやや遅い古墳時代前期の土器まで混ざる。器種は高环か圧倒的に多く、丸底壺も比較的多く出土している。これらの器種は古墳時代中期に多く使われるようになるが、流路に円疊と一緒に投棄している様子から、祭祀後の「なおらい」とも呼ばれる供食儀礼の後に投棄したと考えられる。このような事例は少なく、貴重な資料と言えるだろう。

縄文時代の遺物は、縄文中期中葉から後葉にかけての土器が出土した。これらの土器は、居盤村に沿つて形成された包含層から出土している。自然堆積の層から出土しているが、土器の摩滅状態はそれ程ひどいものではない。したがって、比較的近い場所に集落などの生活域が存在している可能性がうかがえる。北西から舌状に伸びてくる低丘陵上には、「白岩下1遺跡」と言われる縄文晩期の遺跡の存在も知られている。この丘陵端部に位置する当遺跡に縄文中期の包含層が確認されたことは、今後、この地域の特性を知る上で重要な要素の一つとなると考えられる。

本書をまとめにあたり、当遺跡について下記の方々に御助言、御教授していただいた。最後になつたが心より感謝申し上げる。（順不同、敬称略）

岩本 貴、加藤賢二、勝又直人、河合 修、笠原千賀子、渋谷昌彦、樋口誠司、鈴木敏則、中嶋郁夫、長谷川睦、平野吾郎、丸杉俊一郎、向坂綱二

### 参考文献

- 加藤賢二 1979 「白岩下遺跡—西方川河川改修工事における採集遺物—」『森町考古14』
- 静岡県 1995 『静岡県史 資料編3 考古三』
- 長谷川睦 2001 『領家遺跡II・御崎古墳』財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 勝又直人 1999 『方吹遺跡』財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 中嶋郁夫 1985 『古墳時代の土師器』『静岡県考古学会シンポジウム6』
- 水島和弘 1984 『三沢西原遺跡』 静岡県名川町教育委員会
- 坂本和弘 1999 『西袋遺跡』 静岡県菊川町教育委員会

# 写 真 図 版



白岩下遺跡遠景（南より）



白岩下遺跡全景（上空より）



中世面全景（東から）



SC-27全景（南西から）

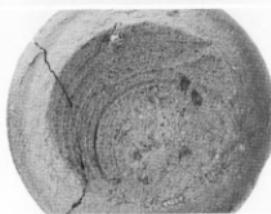
図版2



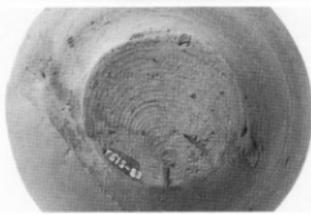
5



8



5



8



7



10



13



22



23



41



24



43



38



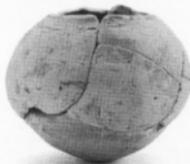
37



39



16



42



45



50

図版4



51



52



56



60



58



66



15

弥生～古墳時代の遺物



118～122

石製品



67~87・116・117



88~115

縄文時代の遺物

# 報告書抄録

ふりがな	しらいわしたいせき
書名	白岩下遺跡
副書名	平成15年度一級河川西方川住宅地関連公共施設等総合整備(統合Ⅰ級)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第147集
編著者名	佐野五十三 中田出 鶯坂有吾
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261
発行年月日	西暦2004年03月25日

所取遺跡	所在地	コード		北緯 °・'・"	東経 °・'・"	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白岩下遺跡	静岡県小笠郡 菊川町加茂	22462		34度 44分 44秒	138度 04分 52秒	2003.11 ? 2004.01	406m <sup>2</sup>	一級河川西方川住宅地関連公共施設等総合整備(統合Ⅰ級)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
所取遺跡		種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
白岩下遺跡	散布地	繩文			深鉢			
		古墳	祭祀遺構 流路		高杯 丸底壺 壺 甕			
	集落	古代～中世	小穴		須恵器 灰釉陶器 山茶碗 山皿			

(緯度・経度は世界測地系に基づく)

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第147集

白岩下遺跡

平成15年度 一級河川西方川住宅宅地関連公共施設等総合整備  
(統合1級) 事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年3月25日

編集発行 財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20

T E L 054-262-4261㈹

印 刷 所 松本印刷株式会社  
〒421-0303 静岡県榛原郡吉山町片岡2210  
T E L 0548-32-0851㈹